

英語ディベート活動を通して培うコンピテンシー

英語科 金子麻子

新学習指導要領の外国語「論理・表現」では取り扱うべき活動としてディベート活動が挙げられているが、高校の英語の授業においては、ディベート活動は未だ広く浸透しているとは言い難い。一方で、ディベート活動は生徒の英語力だけでなく、論理的・批判的思考力やコミュニケーション力、協働する力を高めると言われている。これらの力は、コンピテンシーの構成要素として捉えられていることから、英語ディベート活動を行うことが生徒の論理的・批判的思考力、協働の力など、コンピテンシーに関わる力を育むことにつながるのではないかと考え、英語の授業でディベートの指導に取り組んだ。

〈キーワード〉ディベート活動 コンピテンシー 批判的思考力 論理的思考力 協働

1. はじめに

総合知としてのコンピテンシーとは「課題を発見し知識やスキルを状況に応じて組み合わせるなどして、社会の場で成果をあげる包括的能力とその行動特性」（お茶の水女子大学コンピテンシー育成開発研究所）と定義され、その例としては動機付け、自主性、協働性、コミュニケーション能力、創造性、問題解決能力などが挙げられる。中等学校教育の場でもこのようなコンピテンシー育成が重視されるなか、高校英語教育においては、既に文法重視型の指導を脱して英語をコミュニケーションツールとして捉えた指導へのシフトがなされており、意味内容を重視した英語の授業を通してコンピテンシーの育成に取り組むことが可能である。本研究では、英語の授業でディベート活動を実践することを通してコンピテンシーの構成要素とされている論理的・批判的思考力や問題解決力、協働する力、伝える力などを生徒が身に付ける過程を検証する。

2. ディベートとは

学習指導要領は、ディベートを「与えられた論題について肯定側と否定側に分かれて、一定のルール、進行の方法、制限時間などに従って、自分の立場の正当性を聴衆に受け入れてもらうことを目的として議論する対立型の言語活動」と定義し、「論理・表現」(IおよびII)で取り扱うとしている(文部科学省,2018,p.113)。また、松本・鈴木・青沼(2009)はディベートを、「ある論題に対して、対立する立場をとるディベーター(議論を直接交わす人)同士が、聴衆を論理的に説得するために議論すること」と定義する(松本・鈴木・青沼,p.5)。本研究では「聴衆」を設けることはなかったが、ディベートを「ある議題に関して、一定のルールのもと、肯定側と否定側に分かれて、自分の論が相手の論よりも優れていることを示すために論理的に英語で議論する」こととした。

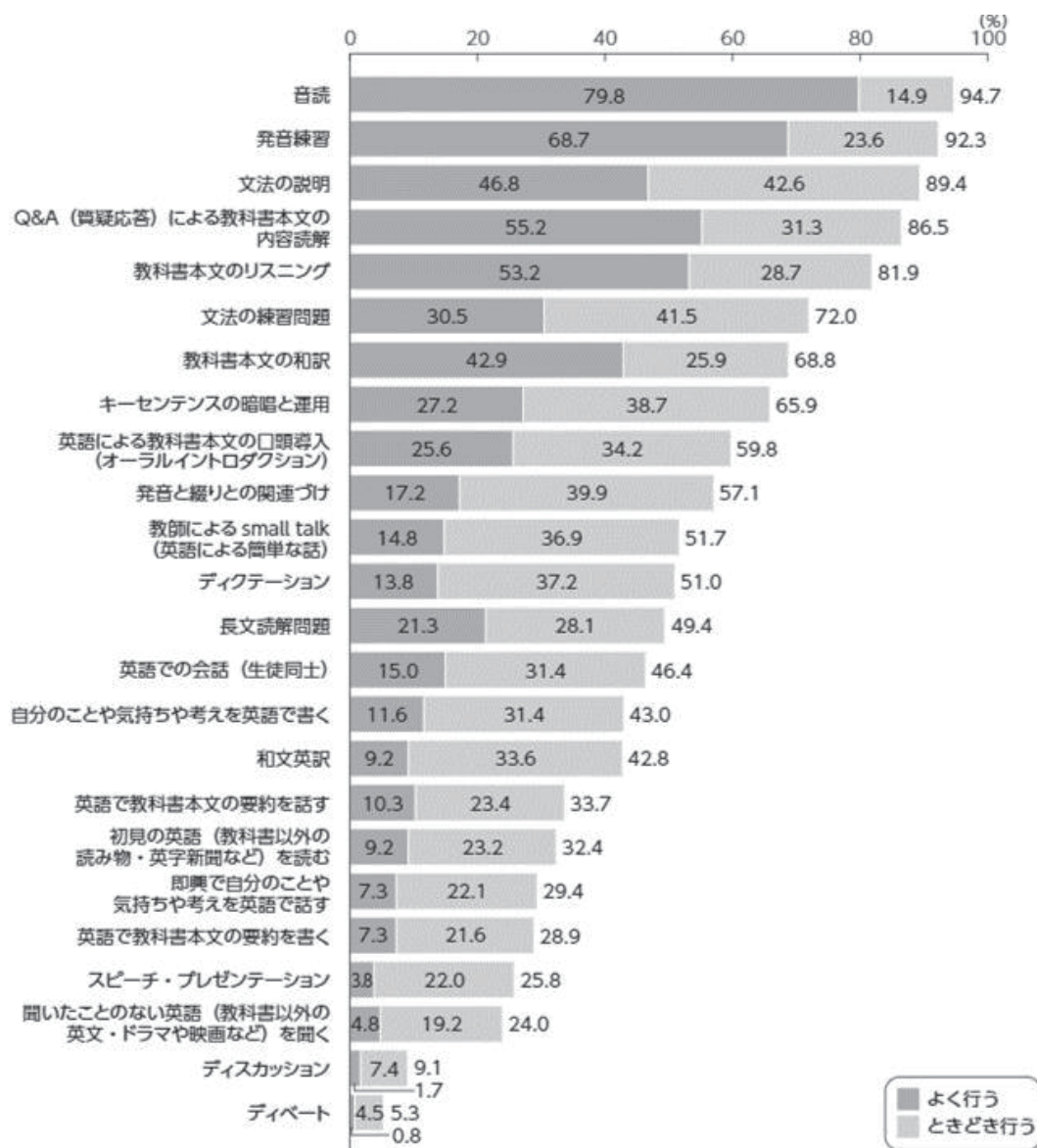
3. 高校英語教育におけるディベート

教育活動にディベートを取り入れることの教育的意義は大きい。坂口(2022)によると、その効果は、批判的思考力や論理的思考力、協調性、英語力、プレゼンテーション力、迅速な思考力の育成など、実に多岐にわたる。高校の英語の授業にディベート活動を取り入れることの教育的効果を示す実証的研究も多く、有嶋(2010)は、「英語II」の授業において12時間のディベート活動を行い、ディベート活動への取り組みが英

語スピーキング力と批判的思考力の伸びにつながったとしている。また、檜尾（2011）の実施した質問紙調査によると、ディベート活動に参加した生徒の70%が英語学習に対する意欲・動機づけの高まりを示しており、教師・生徒の80%が「ディベートが英語力の向上に役立っている」と認識していた。高畑・清水（2017）は、ディベートに取り組んだ生徒のパフォーマンスの質に変化がみられ、生徒はディベートの面白さや話すことの重要性、論理的に物事を述べることの重要性に気づき、生徒の英語4技能に対する取り組みが能動的になり、自ら学ぶ姿勢へとつながったと指摘している。これらの論理的思考や批判的能力は、コンピテンシーの構成要素のひとつでもあり、協働力と併せて、生徒のうちに育むべき重要な資質であると言えるだろう。

3.1. 高校英語教育におけるディベート指導の現状

上記3で述べたように、高校の英語の授業にディベート活動を取り入れることの意義は大きいですが、現状では授業でディベート活動が広く行われているとは言い難い。2015年に行われた全国の中学校（1801名）・高校（2134名）のコミュニケーション英語担当教員を対象としたベネッセ教育総合研究所の調査によると、ディベート活動を授業で「よく行う」「時々行う」と回答した教員は併せて全体のわずか5.3%だった（図3.1）。



*各横棒の外側にある数値は「よく行う」+「ときどき行う」の%。

図 3.1 「授業において、次のようなことをどのくらい行いますか」に対する回答（ベネッセ教育総合研究所，2016）

坂口（2022）による高校2年生183名を対象とした英語ディベート経験に関する質問紙調査によると、「ディベートを行ったことがある」と回答した生徒は全体の13.6%だった。樫尾（2011）が高知県内の英語教員133名に実施した調査では、「ディベートを指導したことがある」と回答した教員は31.6%で、そのうち36.6%が指導経験20年以上の教員だった。指導経験が豊富なほどディベートの指導経験があり、指導経験5年未満のディベートを指導したことがある教員は7.3%だった。

高校の英語授業でディベート活動が浸透していない理由としては、生徒の英語力や指導の難しさ、指導にかかる時間等が挙げられるだろう。樫尾（2011）の実施した質問紙調査によると、ディベート活動を実施したことのない教員は、その理由として、「生徒の英語力がない」「ディベートのやり方がわからない」「ディベートフォーマットはどのようなものがよいかわからない」「議題をどのように選ばばいいかわからない」などを挙げた。実際、ディベート活動には高度な英語運用力が求められるし、指導にも様々な配慮が求められ、ある程度の時間も要する。教科書や指導書には、ディベートに関する項目はあるものの、その指導方法に関する情報の量や質は十分ではない。

3.2. 学習指導要領におけるディベート

学習指導要領の「論理・表現」（IおよびII）では、「話すこと [やりとり]」における目標として「イ 日常的話題や社会的な話題について……ディベートやディスカッションなどの活動を通して……意見や主張などを論理の構成や展開を工夫して話して伝え合う」ことが設定されている。また、学習指導要領はディベートを「賛成又は反対の立場を明確にして、自分の立場の意見や考えにより妥当性や優位性があることを述べる活動」としており、ディベートの方法として「ペアで意見をやり取りしたり、グループでルールに従って議論したりする」などを挙げている。指導の際には、「やり取りの目的や話題、生徒の習熟の程度などに応じて、適切な方法や形式を設定する必要がある」とし、「生徒に賛否両方の立場を経験させる」ことが「多様な観点から考察する力」の育成につながるとしている。

4. 「英語表現 II」における実践

本章では、2021年11月から2022年2月にかけて、本校の「英語表現 II」の授業で行ったディベート活動の取り組みを紹介する。「英語表現 II」は、旧学習指導要領における科目であるが、ここで取り扱うディベート活動はそのまま新学習指導要領の「論理・表現」で取り組むことができると考える。

4.1. 概要・スケジュール

上記「英語表現 II」の授業は、文法項目の習得を中心とした授業が週1回、スピーキング活動を中心とした英語母語話者の講師とのティーム・ティーチング（TT）が週1回の週2回で構成される2単位の科目であり、ディベート活動はTTにおいて週1回（45分）、合計8回行った。表4.1にそのスケジュールを示す。初回では、ディベートとはどのような活動かを説明し、ディベート活動に取り組むことの意義を生徒たちに話し合わせた。第2～4回は、ディベートの各段階（立論、反論、まとめ）の役割と注意すべき点などを説明し、様々なトピック

表 4.1 ディベート活動のスケジュール

	主な活動内容
第1回	ディベートに関する説明
第2回	立論に関する説明・グループ活動
第3回	反論に関する説明・ペア活動
第4回	まとめに関する説明・ペア活動、トピック決め
第5回	実践1
第6回	実践2
第7回	実践3
—	（ライティング）
第8回	テスト
—	事後アンケート（Moodleで実施）

例を用いた段階ごとの練習としてのグループ活動やペア活動（スピーキング）を行った。第5～7回は、4人1組のグループに分かれて実際にディベート活動を行い、第8回で評価を行った。その後、事後アンケート調査を実施した。また、TTではなく文法の授業の一環としてではあるが、ディベート活動で取り扱ったトピックを用いてエッセイを書く活動も行った。

4.2. 内容

本章では、表4.1のスケジュールに沿って行われた授業で具体的にどのような指導を行ったかを紹介する。なお、授業は全て英語で行われた。

4.2.1. ディベートの概要説明

第1回の授業では、まずは生徒にディベート活動とは何かを説明した。図4.2.1-1を提示しながら、口頭で、American Debate Leagueの採用する定義、“A debate is an organized argument or contest of ideas in which the participants discuss a topic from two opposing sides. Those who agree with this statement or idea are the ‘Pro’ side. Those who will not agree with this statement or idea are the ‘Con’ side. Each side will show in an organized and clever way why they believe to have the right answers. They will use examples and evidence to support their ideas while working towards a conclusion.”を用いて説明した。

次に1対1でディベートを疑似体験するために、“We should practice debates in our class.”というテーマで、ペアになり意見を述べた。生徒たちは、自分の考えを英語で表現しながら、ディベート活動の意義やその問題点を考えた。その後、生徒たちからの意見を吸い上げながら、ディベート活動の意義に関して、図4.2.1-2を提示し、その例を紹介した。

最後に、“Ochakou is a great school.”というテーマで、ディベートに慣れるためのグループ活動を行った。3人1組になり、生徒1と2は“Ochakou is a great school.”の理由を提示する。生徒3は、ジャッ

ジとなり、どちらの理由が優れているかを判定するが、その際に、その理由も述べる。同じ活動を、“English is an important subject to study.” “We should have more strict school rules (about uniforms, hair style, etc.)” “We should have longer class hours.”などのテーマで生徒の役割を変えながら同様の活動を行った。これは、自分の考えを論理的に述べるための練習であり、まだディベートの形式を踏んでいるわけではないが、生徒が論理的に意見を述べるにはどのように自分の考えを表現すべきかを考える機会となると考えた。また、ジャッジの役割を果たす生徒は、両者の考えに優越をつける必要があるという視点に立って様々な考えを聞くことになり、批判的思考力を培う練習になるという意図があった。生徒たちは四苦八苦しながらも、自分の意見を述べていた。初回の授業は、ディベートがどのようなものであるかが「なんとなく」分かるようになることが狙い

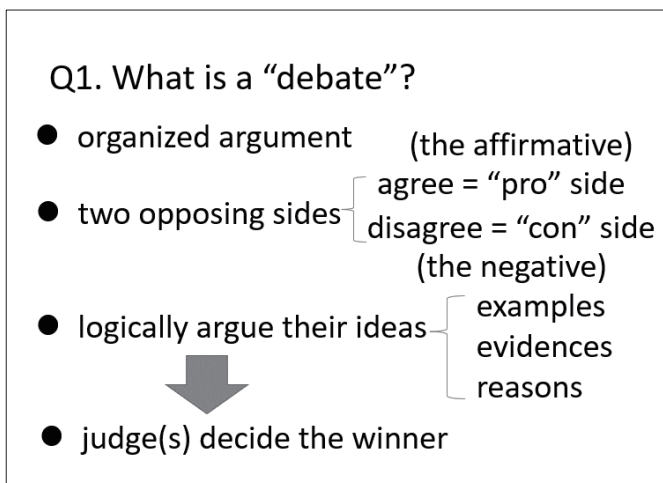


図 4.2.1-1 授業スライド：ディベートとは

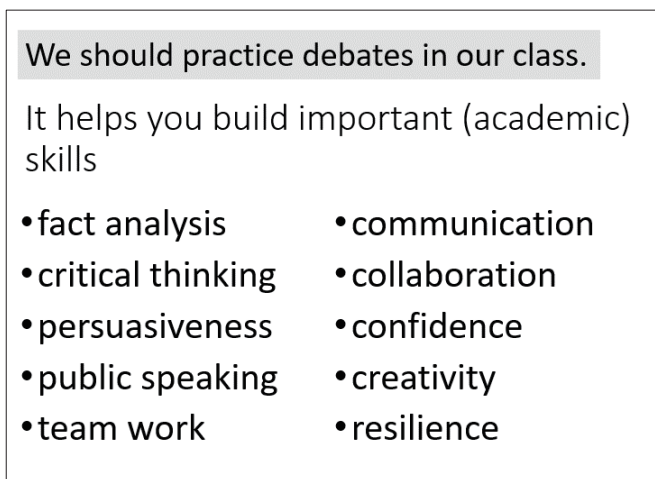


図 4.2.1-2 授業スライド：ディベートの意義

であったが、生徒の反応からは、その目的は果たされたよう感じられた。

4.2.2. 本研究におけるディベートの構成と各段階の指導

ディベートの進め方は複数あるが、本研究では「立論→反論→反論への反論→まとめ」という四段階を経ることとした。人数の関係上、最終的に4人1組でディベートを行うことにしており、4人にそれぞれ役割を与える必要があることから、この四段階が最適であると考えたためである。したがって、2回目以降の授業では、このそれぞれの段階の役割や注意点を説明した後、いくつかのトピックに沿って各段階の練習をするという手順をとった。

4.2.2.1 立論 (constrictive argument)

2時間目の授業では、上記の「立論→反論→反論への反論→まとめ」というディベートの構成を説明し、第一のステップである立論 (constrictive argument) にフォーカスした (図 4.2.2.1)。

自分たちの主張である立論は、ディベートにおける非常に重要な要素であるために、立論の際に注意すべき点が多いことを指摘し、なかでも「いかに論理的に自分たちの意見を展開するか」に重きを置き説明した。具体的には、初回に使用した“Ochakou is a great school.”というトピックを用いて、「なぜそう言えるのか」を具体的かつ客観的、

論理的に説明する必要があると説いた。初回のグループ活動の際に生徒が述べていた理由に「生徒が幸せだから」「自由だから」というものがあつたが、「生徒が幸せだから」という理由は、主観的、感情的なものであり、具体性がなく、このような情意的な理由に説得力を持たせるためには数値 (アンケート調査など) で具体性を補う必要があるが、授業の場合はその様な調査を行うことが現実的ではないため、異なるアプローチが必要であると説明した。一方「自由だから」という理由には、「校則が少ない」「制服にアレンジが可能」「生徒に多くの自治が与えられている」などの具体例を挙げることが可能であるため、立論においてはこの様に具体的に説明できる理由を用いるべきであると説いた。生徒には、この様に身近な例を用いて抽象的で主観的な論と具体的で客観的な論の違いを提示するとわかり易いだろう。

また、立論を述べる際に必要な表現 (I believe that..., I feel that..., I am certain that..., That is because..., The reasons is that..., Let me tell you the reason.など) も併せて紹介した。

次に、いくつかのシンプルなトピックを与え、立論の練習をした。トピックは、“Math is more important than English.” “Our school uniform should be abolished.” “There should be no tests (midterm/final) during the semesters.” “Ochakou should be co-ed.”など生徒たちにとって身近なトピックとし、以下の手順で練習をした。

1. 自分の立論を考える (キーワードをメモする) : 1分
2. 自分の立論をペアの相手に伝える : 1分 (相手の意見をメモする) ×2
3. 相手の考えの優れた点とその理由をお互いにフィードバックする : 1分×2
4. 立論を英語で書く : 2分

4の際には、資料1の Debate Planning Sheet を配布して、それぞれのトピックの立論をシートに英語で書かせた。このシートは次週以降も持参することとし、反論などを追記していった。

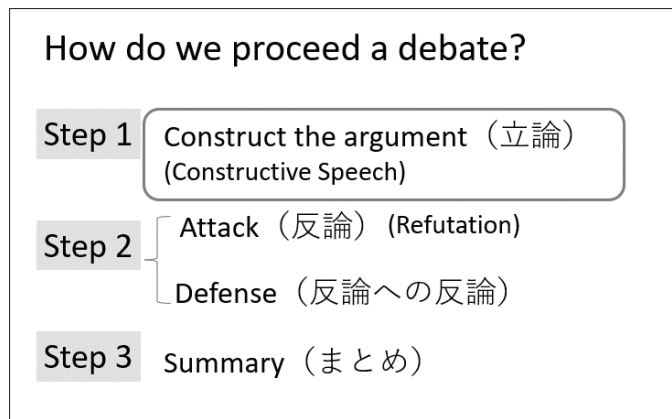


図 4.2.2.1 授業スライド : ディベートの構成

4.2.2.2 反論 (refutation)

3 時間目は、反論(attack または refutation)と反論への対応(defense)を扱った。refutation は相手の論が正しくないことを指摘する役割を持っており、いかにして相手の立論の合理性を崩していくかが大きなポイントとなる。反論の方法は多数あるが、授業では相手の立論を直接的に攻撃する direct attack と、立論に含まれている前提 (hidden assumption) を攻撃する「三角ロジック」河野 (2021) を紹介した。説明の際には、再び、第 1 回の授業で取り扱った“Ochakou is a great school.”の例を用いた。第 2 回の立論で使用した例“Students in Ochakou have a lot of freedom. For example, students are given high level of autonomy.” (お茶高生には自由がある。例えば、生徒には大きな自治権が与えられている) に関して、“The ‘freedom’ that is given to Ochakou students is not real ‘freedom.’ Students cannot decide important issues by themselves. It’s not really autonomous. Teachers (or the school) get to decide the majority of the events.” (生徒に与えられている自由は、真の意味での自由ではない。重要事項に関しては教員に決定権があり、生徒に与えられている自治は限定的である) と、立論を直接的に否定するのが direct attack である。これに対して、立論の前提となっている要素の合理性を攻撃するのが indirect attack で、前述の立論例は、「自由であることが生徒の満足感を生む」という前提の上に成り立っているが、そこに疑問を投げかける。“Does ‘freedom’ always make people happy? Maybe it could be burden for some students?” (自由は常に人を幸せにするのか。過度の自由は生徒に負担を強いることにならないか) などというもので、河野 (2021) によると「三角ロジック」と呼ばれるものである。専門用語を増やすことを避けるために授業では「三角ロジック」という名称は使用せず、direct attack (直接的な攻撃) に対して indirect attack (間接的な攻撃) という呼称で説明した。

この段階で指導上注意すべきこととして、「refutation はあくまでも相手の立論を攻撃するものである」という大前提がある。相手の立論を攻撃するためにはその立論を正確に把握する必要があるが、相手の立論を理解せずに (または無視して)、単に自分たちの立論と対立する論を述べてしまうことがある。例えば、先ほどの例の場合に、Ochakou is a great school の pro side が立論として“Students in Ochakou have a lot of freedom. For example, students are given high level of autonomy.” (お茶高生には自由がある。例えば、生徒には大きな自治権が与えられている) と述べているのに対して、その反論として、“There are many students who are not happy about their school life due to heavy workload.” (勉強しなくてはいけないことが多すぎて、幸せな学校生活を送っていない生徒が多い) などをぶつけてしまう。これでは、相手の立論を攻撃していることにはならず、ディベートが成立しているとは言えない。このような点を指摘し、refutation の段階では相手の立論の脆弱性を攻撃することが大前提であることを強調する必要があるだろう。

この反論の後に続くのが反論への対応 (defense) である。相手の反論に対する、更なる反論である。この際も先ほどと同じく、相手の反論の趣旨を正確に理解し、その論が適切な指摘ではないことを示す必要がある。このことを、例を用いて説明するとともに、反論の際に利用できる表現 (You said, but that’s not true/important/relevant) なども紹介した。

その後、前週に配布した Debate Planning Sheet (資料 1) をもとに、反論とその対応の箇所をペアで練習した。立論の箇所には、前週にすでに立論が記入されているため、お互いにその立論に対して反論を考えた。相手の反論を聞いた後、すぐにそれに対する反論を述べ、その後、お互いに改良のためのフィードバックを行った。

4.2.2.3 まとめ (summary)

4 時間目は、まとめ (summary) の指導を行った。この段階では、これまでの論を効果的にまとめ、自分たちの論の優位性を再度審判にアピールすることが重要である。そのために、自分たちの論がいかに論理的に優れた強固なものであるかを端的に述べ、さらに相手の論の根拠の弱さ、非論理性などを指摘することを目

指す。これらを説明する際には、logical（論理的）、valid（正当な）、legitimate（合理的な）、irrelevant（見当違いの、不適切な）などのアカデミックな語彙を併せて指導するのもよいだろう。また、この一連のディベートの手順を文字化すると、エッセイの骨組みとなることを説明し、ライティングの構成を考える際に参考になることも説明した。これは、この後のライティングの指導にもつながる（4.2.4 ライティング参照）。

生徒たちは、Debate Planning Sheet を用いてトピックごとに summary を作成し、ペアでフィードバックを与え合った。

4.2.3. ディベート活動（実践）

第5～7回では、4人1組になりディベートを実践した。ディベートのトピックに関しては、実践1回目は“Ochakou should be co-ed.”（お茶高を共学にすべきである）とした。これは練習でも取り扱ったことのあるトピックだが、実践の初回であるためトピックの難易度は下げた方が良くと判断し、練習したことのある馴染みの深いトピックを選定した。第2, 3回および最終回（テスト）のトピックに関しては生徒から希望を募ったのちに投票を行い、多数決で決定した。テーマは以下の通りとなった。

実践2回目：Ochakou should change its curriculum so that students can decide which courses to take from the 2nd grade.

（2年次から履修科目を選択できるようにカリキュラムを変更すべきだ）

実践3回目：Lunch should be provided at school.（学校は給食を提供すべきだ）

最終回（評価）：Voting should be mandatory for every eligible citizen.（選挙における投票を義務化すべきだ）

2回目と3回目のトピックは生徒たちにとって身近なテーマであり、意見を述べやすいものである。最終回のトピックは社会的なテーマであるために難易度はあがるものの、生徒たちは他教科ですでに選挙に関するトピックを議論しており、話しやすいものであったようだった。

グループを4人1組としたのは、本校の1クラスの生徒数が40名であり、全部で10グループとなるために、2組ずつでディベートを行うことが容易だったためである。新型コロナウイルス感染症拡大予防のために、教室で向かい合って議論することは避ける必要があり、2教室を使用して6グループと4グループに分かれて活動した。

まず、ディベートの手順および時間配分を確認し（図4.2.3）、プランニングやメモとして使用するためのDebate Sheetを配布し、その使い方を説明した。その後は教員はタイムキーパーとなり、生徒たちはグループ毎にディベート活動を行った。ディベート活動はすべてiPadで録画した。

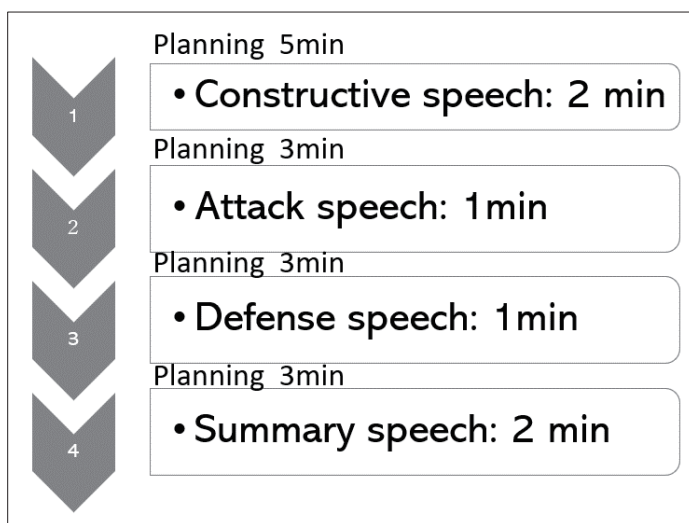


図 4.2.3 授業スライド：時間配分

本来ならば、聴衆および審判（ジャッジ）を設定すべきではあるが、グループでプランニングをする時間が設定されているため、その間にジャッジが活動に参加することができないことを考慮し、ジャッジは設定しなかった。

iPadで録画したのは、教員が各グループのディベート活動を把握するためであるが、発話の際の音量が小さすぎて聞き取れなかったり、録画ボタンが押されておらず録画できなかったりなど、機器操作上の問題も少なからずあった。生徒が機器操作に慣れるためにも、評価回に先立って何回か録画の機会を設けておく必要があるだろう。

また、ディベート終了後、生徒は自分たちのディベート活動を振り返り、反省点や気づきなどを「振り返

りシート」(資料2)に記入した。

4.2.4. ライティング

前述 4.2.2.3 で述べたように、ディベートの結論部分の論構成は、エッセイの構成に応用することが可能であるため、ディベートで論じたトピックを使用したエッセイライティングを実施した。「聞くこと・話すこと」を「書くこと」につなげる指導である。生徒はすでに行ったディベートのトピックのなかから好きなトピックの一つを選び、pro/con のサイドを自分で決め、自論を展開する。その際、自分と異なるサイドの意見が counter argument として利用できることを示し、その counter argument に対して、反論することも忘れないようにと注意した。生徒たちは、「立論－反論－反論への対応－まとめ」という流れですでに論じているために、スムーズにエッセイを構成することができた。この際、ディベートで使用した Debate Planning Sheet が大いに参考になる。また、録画の不備もあり教員はこれまでのすべてのディベートを見ることはできていなかったが、生徒の書いたエッセイを読むことにより、ディベートがどのような流れで行われたかを教員が把握することができたという副産物もあった。

4.2.5. 評価

ディベート最終回は評価の対象となることを生徒に告げ、ディベート活動を iPad に録画して評価材料とした。トピックは前述の通り、“Voting should be mandatory for every eligible citizen.”(選挙における投票を義務化すべきだ)である。

ディベート後に教員が iPad の録画映像を視聴し、delivery (発表の仕方)に関して、clarity (明瞭さ)、pace (話す速度)、volume (声の大きさ)を総合的 (holistic) に、10 点満点で評価した。発表の内容や文法的正確性に関しては、グループでディベートを行っているために必ずしも発話されたものが発表者の言葉ではないことから、評価の対象とはしなかった。

本研究は「英語表現 II」の授業で行っているために、この評価を 4 技能 5 領域の「話すこと [やりとり] 発表」とするか「話すこと [発表]」とするかを決定する必要はなかったが、新学習指導要領のもとでは、ディベートの発表をいずれかのカテゴリーに分類する必要がある。新学習指導要領では、ディベートは「話すこと [やりとり]」の項目で扱う活動となっているが、考える時間などが与えられていることから、その間に話すべきことを文章化してしまう生徒もおり、この場合は「話すこと [発表]」により近いのではないかと考える。文章化するにはそれなりの時間がかかるため、このような文章化は論が深まることを阻害してしまい、また、書いたことをただ読み上げるだけになってしまった生徒もいた。あくまでもメモ程度にとどめておくように指導したが、即興的な発話に大きな不安を抱く生徒も少なくないようだった。

生徒は 4 人 1 組で協力し合って論を立てていたが、それゆえに発話者の使用する文法や語彙はグループ内の別の生徒のアイデアや助言が含まれていることもあり、先述のようにあくまでもデリバリーに焦点をおく評価になってしまうなど、ディベートの評価には考慮すべき点が多いと感じた。今後は評価項目に関しても精査しながらディベート用のルーブリックを作成するなど、評価方法の向上が求められるだろう。

5. 振り返り

第 5～8 回のディベート実践後、生徒たちは「振り返りシート」(資料 2)を用いてディベートに関して振り返りを行った。また、すべてのディベート活動終了後、Moodle (本校の使用する学修プラットフォーム)上にディベート活動に関するアンケートを設定し、生徒に回答を促した。本章では、この 2 点の振り返りの結果を考察する。

5.1 振り返りシート

各ディベート実践後に記入された「振り返りシート」には、生徒がそれぞれの回に行った内省が書かれて

いた。生徒たちは「良くできた点」「改善を要する点」を考えることにより、自分たちの活動を振り返り、次にどうすればより良いディベートになるかどうかを熟考していた。なかでも、上手くいかなかった点を改善するためにはどのような手段があるかを自ら考え具体的な改善策を提示しており、このために回を追うごとに上達がみられたと考えられる。「改善を要する点」とその対応策の一例を以下に挙げる。

- ・文法にミスがあったり言い間違いをすることがあった→焦らず落ち着いて自分の言いたいことをまとめて話す
- ・相手の意見に対する反論を考えるのに時間がかかってしまった→事前に相手がどんなことを言いそうか考えておく必要がある
- ・言いたいことを英語に変換するのに時間がかかってしまった→難しい単語を使うのではなく、わかり易くて伝わり易い単語を選ぶ
- ・立論の理由を決める際に、たくさんある理由の中で、最も説得力のあるものを1つだけ選ぶようにする
- ・具体例をもっと加える

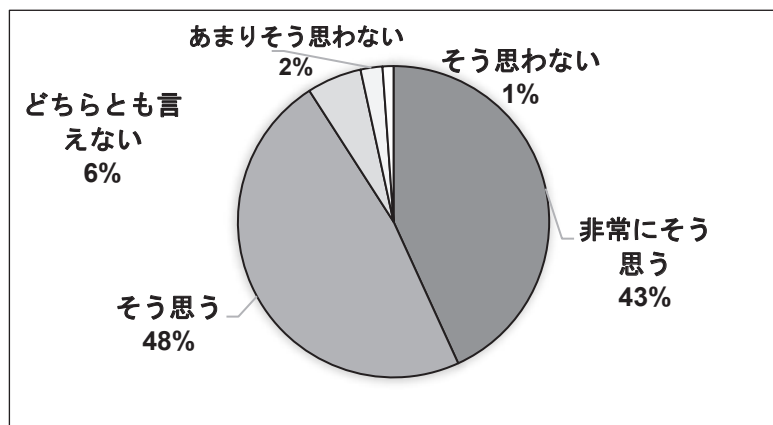
5.2. 事後アンケート

授業後に実施した事後アンケートには、88名の生徒が回答した。質問項目は以下の通りである（自由記述以外は、[1. 非常にそう思う～5. そう思わない]の5件法による回答とした）。

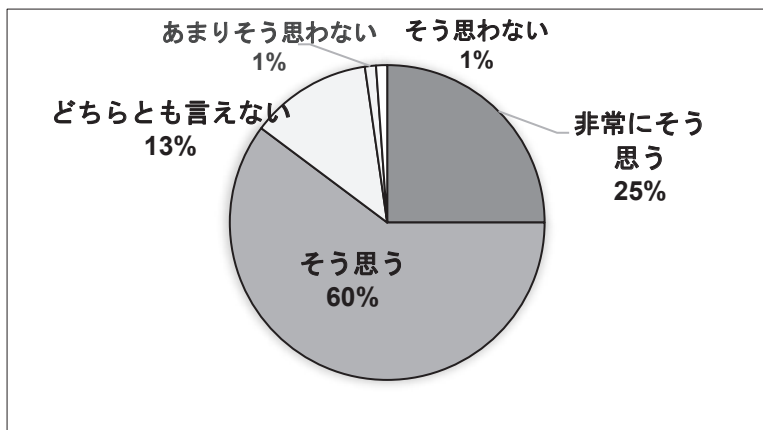
- (1) 授業でディベートに取り組んだのは、良かったと思う。
- (2) 授業でディベートに取り組んだことにより、自分の英語力は向上した。
- (3) 上記質問で、「向上した」と思った方は、具体的にはどのようなスキルが伸びたと思いますか。（複数回答可）【スピーキング力、論理的に考える力、物事を多面的に捉える力、説得力をもって論じる力、英文を作る力、語彙力、文法的な知識、相手の主張を理解する力、その他】から選択
- (4) 上記「その他」を選んだ方は具体的にはどのような力が身についたのか教えてください。（自由記述）
- (5) ディベートには楽しみながら取り組めた。
- (6) ディベート活動は難しかった。
- (7) ディベート活動に関して、意見・提案等あれば、書いてください。（自由記述）

各項目の回答は以下の通り。

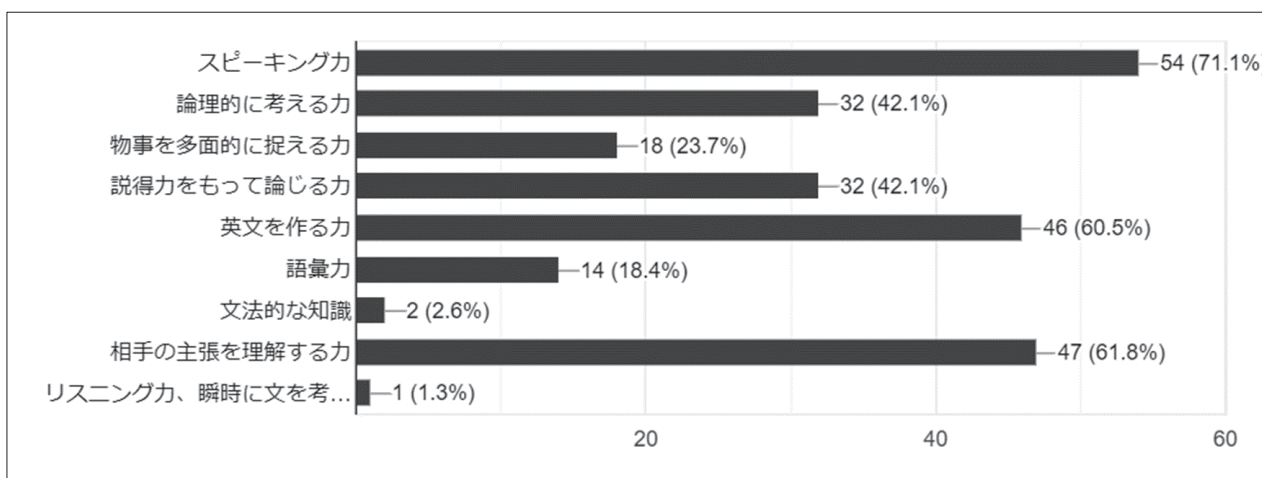
- (1) 授業でディベートに取り組んだのは、良かったと思う。



(2) 授業でディベートに取り組んだことにより、自分の英語力は向上した。



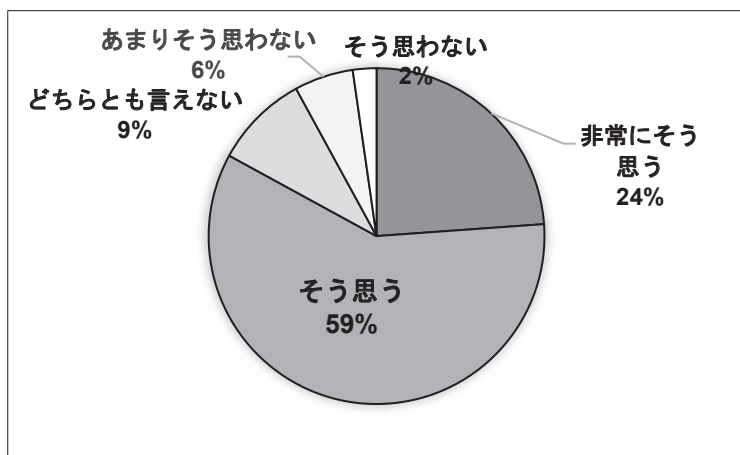
(3) 上記質問で「向上した」と思った方は具体的にはどのようなスキルが伸びたと思いますか。(複数回答可)



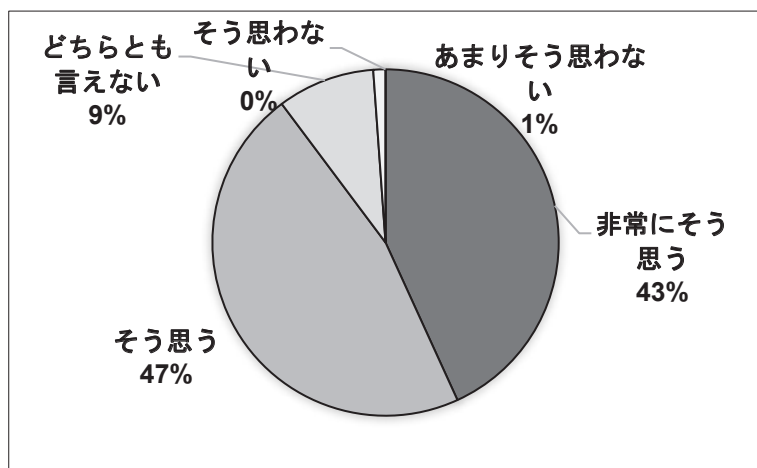
(4) 上記「その他」を選んだ方は具体的にはどのような力が身についたのか教えてください。

- ・日本語で考えたことをパッと英語に変えることと、最初から英語で主張を考えること
- ・グループで協力して意見をまとめる力!
- ・短時間で英文をまとめる力がつきました!
- ・ディベートのやり方。自分たちの主張を述べた後に相手からの反論を述べさらにその反論に対して反論し、最後に自分たちの主張を繰り返すというまとめの言い方
- ・なんとかして自分の意見を伝える力

(5) ディベートには楽しみながら取り組めた



(6) ディベート活動は難しかった。



6. コンピテンシーの育成と英語ディベート活動

冒頭に記述したように、お茶の水女子大学コンピテンシー育成開発研究所はコンピテンシーを「課題を発見し知識やスキルを状況に応じて組み合わせるなどして社会の場で成果をあげる包括的能力とその行動特性」と定義し、コンピテンシーの例として、動機付け、自主性、協働性、コミュニケーション能力、創造性、問題解決能力を挙げている。コンピテンシーを構成するスキルとして、関口・宮澤（2021）は、①批判的思考力、②問題解決力、③協働する力、④伝える力、⑤先を見通す力、⑥感性・表現・創造の力、⑦メタ認知能力の7つのスキル（および8つの態度・価値）を挙げる。OECD Definition and Selection of Competencies (DeSeCo)は、キー・コンピテンシーを、①相互作用的に道具を用いる、②異質な集団で交流する、③自律的に行動する、の3つの能力として定義しており（ライチェン・サルガニク、2006）、文部科学省はこれを①社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力、②多様な社会グループにおける人間関係形成能力、③自律的に行動する能力、とまとめ直している（文部科学省、2016）。

これらのコンピテンシーを構成する要素は、ディベートに求められる批判的思考力、論理的思考力、迅速な思考力、コミュニケーション力、協働できる力、などとオーバーラップしており、ディベート活動を通してこれらの力を培うことができると考えられる。

6.1. 振り返り・事後アンケートからコンピテンシー育成を検証

本来であれば、コンピテンシーの構成要素である批判的思考力や問題解決能力に関して、客観的指標を用いて活動後の伸びを測定すべきではあるが、本校では英語の授業以外にもこのような能力を育成する活動が多く行われているために、それらの影響を取り除いてディベート活動が与える影響のみを数値化することは困難であると考えた。そのため、以下は主に生徒の振り返りと事後アンケートの自由記述をもとに、コンピテンシー育成に関して検証する。

6.1.1. 振り返りからコンピテンシー育成を検証

振り返りシートの記述（5.1 参照）からは、自分たちの抱える問題を正確に認識し、その改善策を提示する問題解決能力を示唆する記述が多くみられた。また、「グループ内での作戦会議を密に行うことができて反論が良い感じにできた」「グループで話し合っって様々な意見をだすことができた」「4人で協力して各段階の主張を作ることができた。発表は分担するけれど構成は全員でやった」といった協働に関する記述や、「立論の際に以前よりも多方面から述べられた。そしてより多くの根拠を用意できた」、「We had a lot of opinions from various views.」のように多角的な視点を持ち、「give examples and reasons」「We were able to speak logically」「主観的でなく客観的にディベートするように心がけた」など、論理的・客観的であるように努めるなど、多様な

コンピテンシーの構成要素が育まれていることがうかがえた。

6.1.2. 事後アンケートからコンピテンシー育成を検証

事後アンケートでは、「ディベートに取り組んだことにより、自分の英語力は向上した」（問2）に対して、「非常にそう思う」と答えた生徒が25%、「そう思う」と答えた生徒が60%となり、回答者の85%が英語力が向上したと考えていた。具体的に、どのような力が伸びたと思っているかという質問（問3）に関して、複数選択可で提示された8項目に関しては、選択者の数が多い順に並べると、以下の通りだった（カッコ内は、回答者数。全回答者数は88名）。

- ・スピーキング力(57名)
- ・相手の主張を理解する力(47名)
- ・英文を作る力(46名)
- ・論理的に考える力(32名)
- ・説得力をもって論じる力(32名)
- ・物事を多面的に捉える力(18名)
- ・語彙力(14名)
- ・文法的な知識(2名)

上記8項目のうち、コンピテンシーに関わるものとしては、「相手の主張を理解する力」「論理的に考える力」「説得力を持って論じる力」「物事を多面的に捉える力」が多数選択されており、ディベート活動を通して、このようなコンピテンシーを形成する能力が伸びたと生徒は実感していたようだ。

また、上記質問に設定されていた「その他」を選んだ回答者が、上記以外に身に付いたと感じているスキルに関しては、以下の自由記述がみられた。

- ・グループで協力して意見をまとめる力
- ・短時間で英文をまとめる力
- ・ディベートのやり方。自分たちの主張を述べた後に相手からの反論を述べさらにその反論に対して反論し、最後に自分たちの主張を繰り返すというまとめの言い方
- ・なんとかして自分の意見を伝える力

これらは、コミュニケーション力・協働する力であり、関口・宮澤（2021）の示すコンピテンシーを形成するスキル「伝える力」、「感性・表現・創造の力」と言えるだろう。

自由記述のコメントからも、コンピテンシーの構成要素である、批判的思考力や論理的思考力が伸びたと実感している生徒が見られた。以下、コメント例を挙げる。

- ・ディベートで相手の主張を聞いてそれを踏まえて反論したりまとめたりする力が少しはついたかな、と思えた。
- ・批判的思考力が向上したと思う。
- ・相手の主張を踏まえて論理関係を考える能力が身につくと共に、楽しみながら取り組むことができました。
- ・ディベートを通じてメンバーと親睦を深めたり、即興能力を身につけたりできたと思います。
- ・「どう説得すれば説き伏せられるか」という点をより深く考えられた。

これらのコメントから、英語ディベート活動を通して、生徒は英語力だけでなく、論理的思考力や批判的思考力、コミュニケーション力、協働する力など、コンピテンシーに関わる力を身に付けたと考えられる。

一方で、生徒の回答からは「準備時間／考える時間／話し合う時間が短かった」「事前にデータとか事例とか調べられた方がよかった」「ジャッジがいた方が良かった」など、改善を望む声もあげられた。さらに、個別のフィードバックが与えられなかったために、「学びになっているのか疑問」だったという声も聞かれた。評価に関しても、ディベートに特化した評価項目を用いたルーブリックの作成など、信頼性の高い評価方法

の作成が必要で、よりよいディベート指導のためにはまだ課題も多いことがわかった。

7. おわりに

ディベート活動は高校の英語の授業で積極的に取り入れられている活動ではないものの、英語スピーキング力だけでなく、コンピテンシーの育成にも大きく関わる活動であることがわかった。一方で、指導の難しさや生徒の学力レベルなど、導入にあたり考慮すべき点が多くあることは否定できない。だが、その有用性を考えると、教員は書籍や研修などを利用してその指導法を学び、授業での活動に積極的にディベートを取り入れるように努力することが望ましいと考える。樫尾（2011）はディベートの指導法に関する講習会などの機会の提供を提案しており、高畑・清水（2017）には、具体的な指導法に加えて生徒のパフォーマンスを高めるための指導の際の改善点などが教師の内省的な検証をもとにまとめられている。指導の参考になる書籍としては、河野（2021）中川（2017）や、パラメンタリーディベート人財育成協会（PDA）のホームページなどが挙げられる。これらのリソースを活用し、より多くの教員が授業にディベート活動を取り入れることを強く望む。

参考文献

- AMERICAN DEBATE LEAGUE. What is Debate? <https://www.americandebateleague.org/what-is-debate.html#/>
- 有嶋 宏一.(2010).「高校生の英語ディベート活動は英語スピーキング力と批判的思考力を伸ばすのか」『STEP 英検』22. 115-127.
- お茶の水女子大学コンピテンシー育成開発研究所. <https://www.cf.ocha.ac.jp/icd/j/menu/about/d010706.html>.
- 樫尾文雄.(2011).「高校生のディベート指導を通しての成果と課題」『四国英語教育学会紀要』31. 69-78.
- 河野周.(2021).『中学・高校英語ディベート入門：英語教員のための英語ディベート指導ハンドブック』三省堂.
- 坂口寛子.(2022).『論理・表現』における英語ディベート指導に関する考察」LET Kyushu-Okinawa BULLETIN. (22). https://www.jstage.jst.go.jp/article/letko/22/0/22_27/_article/-char/ja/
- 関口貴裕・宮澤芳光.(2021).「小・中学校教育における各教科等の学びで育成可能なコンピテンシーに関する検討」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系』I, 72, 117-128.
- 高畑伸子・清水真澄.(2017).「高校1年生を対象とした初めての英語ディベート指導実践：より効果的な指導法の気づきと生徒の変容に焦点をあてて」『中部地区英語教育学会紀要』46, 193-200.
- 中川智皓.(2017).『授業でできる即興型英語ディベート』パラメンタリーディベート人財育成協会（PDA）.
- ベネッセ教育総合研究所.(2016).『中高の英語指導に関する実態調査 2015』.
https://berd.benesse.jp/up_images/research/03_Eigo_Shido.pdf
- 松本茂・鈴木健・青沼智.(2009).『英語ディベート理論と実践』玉川大学出版部.
- 文科省.(2016).「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」補足資料(2).
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/gaiyou/1377051.htm
- 文部科学省.(2018).『高等学校学習指導要領解説外国語編・英語編』開隆堂出版.
- D. S. ライチェン, L. H. サルガニク.(2006).『キー・コンピテンシー 国際標準の学力をめざして』明石書店.

資料1 Debate Planning Sheet

topic	constructive argument	attack	defense
(ex) "Ochakou is a great school."			
1) Math is more important than English.			
2) Our school uniform should be abolished.			
3) There should be no tests (midterm/final) during the semesters.			

資料2 振り返りシート

Your group's constructive argument:

1) What did you think about your debate?

2) Things that went well (良かった点)

3) Things that need improvement (改善を要する点→どうしたらより良くなるか, 考えよう!)